寄稿

近藤誠一 氏

近藤文化・外交研究所代表、国際ファッション専門職大学学長

コロナが教える日本の伝統文化の価値

今年もコロナに明け、コロナに暮れた。誰もが暮らし慣れた「日常」から引きはがされた。経済活動は打撃を受け、社会は分断され、政治は一国主義に傾いた。昨日まで人類が誇りに思ってきた近代文明が、目に見えぬ自然の力の前にいかに脆いものであるかが露呈した。

人類は知恵によって高度な文明を築いた。そこから生まれたテクノロジーは森林伐採、農業・牧畜革命による食料増産によって爆発的人口増加を可能にした。化石燃料の大量消費による産業化と大都市化、グローバル化を生んだ。自分が生まれた生態系の枠を大きく超えんばかりの地位を築いた。

だがそれは深刻な気候変動を招いた。解決手段は分かっている。しかし人間の欲望と国家間の権力争いがその履行を妨げている。

他方森林破壊、野生動物の乱獲、家畜増殖がもたらしたパンデミックは、現代医学では制御できない。感染から身を守るには文明化の象徴である巨大都市の密な生活とグローバル化を大きく制限するしかない。人間中心主義の文明で進めてきた繁栄のツケが、皮肉なことに近代生活を否定している。自然には「意思」はないが、生態系のバランスを維持しようとする力が内在している。人の「驕り」はそれを軽視してきた。

人間中心ではなく、生命体を38億年もの間維持してきた自然の摂理に機軸を合わせることが必要だ。「海、空、地のすべての生物を治めよ」（旧約聖書「創世記」）という神の言葉は、人間優位の証ではなく、「生態系のバランスを維持せよ」というお告げととるべきであろう。

神は人間が禁断の木の実を食べることを禁じ、食べると「死ぬであろう」と予言している。それは「知」がつくるテクノロジーが、欲望の際限なき拡大と結びついて、自然破壊や核戦争によって、人類を絶滅に導くことを予言したのではないか。

それを免れるには、原始に戻る必要はない。自然の摂理の中で生き、繁栄した民族がかつていた。江戸時代の日本である。それは「足るを知る」や「三方良し」などの謙虚な生活哲学と、伝統文化に如実に表われていた。工芸の素材は木など自然から頂き、草木染で色をつけ、使い手のことを考えながらひとつひとつ丁寧に手作りをした。使い手は作家の想いを感じて大切に扱い、金継ぎをし、経年変化を劣化ととらずむしろ愛で、最後は土に返した。作り手と使い手が共感で結ばれた。

西洋では、美術工芸とは自己の芸術性や理念を、自然物に手を加えて表現するものとされたのに対し、日本の工芸では自分（人間）は主役ではなく、自然の中で、美を教わり、共に表現し、使い手にその心を伝えるものとされた。「松のことは松に習え」（松尾芭蕉）は当然の心得であった。

この哲学の下でテクノロジーに溺れず、自然を主体とした生活の仕組みをつくることが、いま人類が直面している問題の長期的解決の鍵である。日本の伝統文化は現代生活における文化芸術のあるべきモデルとなる。そのような豊かな土壌があってこそSDGsの達成に必要な政策や制度という野菜は大きく育ち、実を結ぶであろう。

1946年神奈川県生まれ。外務省入省後、在米国日本大使館参事官、同行使、外務省経済局審議官、OECD事務次長、外務省広報文化交流部長などを経て、ユネスコ日本政府代表部特命全権大使、駐デンマーク特命全権大使、2010年から2013年まで第20代文化庁長官を務める。